

パネルディスカッション3：事務ノウハウの結集が支える在宅医療の面展開
～診療に貢献する医療事務を目指して（その1：書類編）～

演題名	診療に貢献する医療事務を目指して ～えびす英クリニックの場合～
-----	---------------------------------

概要

えびす英クリニックでは、年間約180名の患者を在宅で診療している。約70名が亡くなられ、そのうち約4割を在宅で看取っている。患者の依頼元としては、病院約40%、ケアマネージャー約25%、訪問看護師約20%などである。依頼があった場合は、訪問診療で不在の院長にかわり、事務スタッフが相談窓口となっている。その際には専用の受付用紙で、患者情報のポイントを整理してから院長に報告し、出来る限り受け入れがスムーズにいくよう努めている。

実際に訪問診療がスタートすると、在宅時医学総合管理料の算定要件にもなっている患者の療養計画が重要となってくる。当クリニックでは、電子カルテ（ダイナミクス）に装備されている書式を用いて、作成している。患者への指導については、療養計画書を渡すのではなく、次月の訪問予定日を書き込んだカレンダーに「療養のポイント」「事務連絡」などを記入して、行っている。

その他、在宅医療で使用している帳票類は、訪問看護指示書、療養費同意書、介護職員等喀痰吸引等指示書、居宅療養管理指導書など多岐にわたるが、療養計画書のように厚生労働省が雛型を示していない書類もあり、それぞれの医療機関で手さぐりで、作成している状態である。

今回、当クリニックの例を示すとともに、他の医療機関との情報交換を通して、より分かりやすく、より効率的な手法を探り、事務スタッフとして、在宅医療の多職種連携の一翼を担えればと考える。